

古都西安の変遷及び歴史・文化の変化との関係

朱 士光

陝西師範大学

I 西安—世界的に有名な古都

西安は中国七大古都¹の長を誇り、世界五大古都²の一つでもある。中国歴史上、西周(紀元前1059—紀元前771年)、秦国及び秦王朝(紀元前383—紀元前207年)、西漢(紀元前202—8年)、新莽(9—23年)、漢更始帝劉玄(24—25年)、赤眉帝劉盆子(25—26年)、東漢献帝(190—195年)、西晋愍帝(313—316年)、前趙(318—329年)、前秦(351—385年)、后秦(386—417年)、西魏(535—556年)、北周(557—581年)、隋(581—618年)、唐(618—904年)、大斉帝黄巢(880—883年)等16の朝廷・政権がここに都を置き、都としての歴史は1133年間にも及んだ。都市としての歴史と言えば、西周初期の文王が豊京を建てた頃、つまり紀元前1059年³から起算すれば、今日までに3061年もの歴史がある。城としては早い時期に建てられ、都としての期間が長いことから、西安は中国のみならず、世界においても重要な位置を占め、中国、世界の歴史に大きな影響をもたらした都市である。故に、今日でも西安は国内外で高い名声を誇り、世界中の人々の関心を集めている。

西安は城、都としての歴史が長いだけではなく、長い中国の歴史の中で、紆余曲折で複雑な変化を遂げてきた。西安の発展の歴史は、大きく三つの時期に分けられる。

1. 周、秦、漢、唐などの王朝と政権の都としての時期

紀元前1059年、周文王が豊京を建てた頃から西暦904年まで、唐最後の皇帝—哀帝が長安から連れ出されるまでの時期。この約2000年の間に、前述の16の王朝と政権が相続いで西安に都を置き、その期間が1133年にも及んだ。

2. 五代から清の末まで、地域中心都市としての時期

唐末904年、哀帝が長安を連れ出されてから1911年満州清王朝滅亡までの時期。この1000年余りの間に、五代、北宋、金、元、明、清などの政権と王朝が中国を治めたが、西安は終始、地域の政治、経済、文化の中心として栄えてきた。

1 中国で取りざたされた古都の概念は幾種かに分かれる。“七大古都”説とは、中国古都学会が1988年に歴史地理学家である譚其驤教授の意見を受け入れ、安陽を古都に加えた西安、洛陽、北京、開封、南京、杭州などを古都と呼んだ説である。

2 他の四つは、イタリアのローマ、ギリシャのアテネ、エジプトのカイロとトルコのイスタンブールである。

3 「文王作豊」の年代は殷、武王が紂王を討伐した年から、さらに《史記・周本紀》に記載されている関連内容から推定できる。武王が商を破った年については、多くの学者の間で諸見解がある。ここでは、「夏商周断代工程專家組」が公布した《夏商周断代工程1996—2000年階段成果報告(簡易版)》(世界図書出版公司出版)により、紀元前1046年を武王が商を破った年とし、故に文王が豊邑を建て、遷都したのもこの年だと推測する。

3. 近・現代都市としての時期

1911の年辛亥革命から今日までの90年余りの時期。この間、西安市は中華民国の近代的な発展と中華人民共和国建国以来の現代的な都市建設の時期を経てきた。

以上の三つの発展時期において、西安はその都市形態と構造、都市機能において大きな変化を遂げてきた。これらの発展と変化は、中国歴史上の王朝の更迭、制度の演变、経済・社会発展にのみならず、当時の思想・文化・観念とその変化から受けた影響も甚大なものがある。この三つの時期における西安の都市形態の発展、変化は、当時の歴史・文化の演变との関係において典型的なものであるため、本論では順序だてて詳しく述べていきたいと思う。

II 帝都時代の西周の豊・鎬、秦の咸陽、西漢の長安、隋の大興、唐の長安城

周、秦、漢、唐王朝は、中国の歴史において最も重要な王朝である。特に西漢と唐代は国勢も盛んで、経済・文化が繁栄し、大きな発展を遂げた。その名は海外にも伝わり、近隣諸国にも積極的な影響を与えた。この四つの王朝と、その間の他の十二の王朝・政権とは、いずれも西安地方に都を置き、また前後して周の豊・鎬、秦の咸陽、西漢の長安と唐の長安城等、四つの重要な都市を創りあげた。（その他、臨時的な都として秦の櫟陽もあるが、ここでは特に論じない。）これらの都市は地理的にわずかしこ重ならず、面積や規制もそれぞれ異なっていることから、独立した四つの都市と考えてよいだろう。この四つの都市に関する詳細な研究は、西安の都市発展の歴史を究明する助けになるだけでなく、中国古代前期における都市発展の歴史を解明する手がかりにもなり、中国古代都市の分布とその形態の演变・発展の歴史・文化的な要因を導き出すことができるだろう（図1：西安地方の各時代における城址の変遷略図）。

1. 西周の都——豊・鎬

前述した通り、西安地方で最も古い城は、紀元前11世紀中期、周の文王が澧河西岸に建てた豊京、及び文王の死後、息子、周の武王が澧河東岸に建てた鎬京である。この二つの城は澧河を隔てて相臨み、親密な関係にあり、実質的には一つの城であった。これは即ち中国中原地区における商王朝の後に興った西周王朝の都城である。

周の人々が豊・鎬を都とし、ここを拠点に諸侯を率い、一挙に商を滅ぼし、その後300年間近くも、ここを西周王朝の政治、経済、文化の中心地とし続けた理由は、周の人々のルーツが関中（長安一帯）にあり、人々が長期間にわたって関中を中心として活動してきたからである。豊・鎬は関中地方にある渭水平原南岸の最も広い地域にあり、仰韶文化時代以来、自然環境に恵まれ、先代住民が住着いた場所である。澧河兩岸の客省庄で発見された仰韶文化、客省庄二期文化（陝西龍山文化とも言う）から、西周文化の面影が伺え、馬王村と張家坡遺跡でも周時代の器物⁴が発見された。周の人々が東に向かって移動し、周原の岐邑から、渭水に近く平野が広がり交通も便利な豊・鎬に遷ったのは、自然の成り行きであろう。

考古学者の長年の発掘研究によって、澧河兩岸で豊、鎬二都市の遺跡が発見された。豊京遺跡の面積は約10平方キロで、その北部に位置する客省庄、馬王村一帯の高地では、すでに十

4 鄒衡：《夏商周時期北方地区諸隣境文化的初步探討》、《夏商周考古學論文集》、文物出版社、1960年版、278～281ページ

個所余りの大型建築物の址が発見され、その南部の新旺村、馮村一帯の高地では、数回に渡って西周窖藏大型青銅器が出土した。この二個所が豊京の宮殿と宗廟の跡地と考えられている。一方、鎬京は西漢が上林苑、昆明池を営造した時に大いに破壊され、全容を明らかにすることは難しい。幸い、斗門鎮、白家庄、落水村等、約5平方キロの範囲で西周の遺跡が数多く残っており、十個所余りの大型建築物の址も発見され、鎬京の宮殿地区と推測されている。

現在、豊・鎬の町並と様子を全面的に復原することは難しいとされているが、歴史文献や関連の考古資料を調べることで、おおそを垣間見ることできるだろう。例えば《詩・大雅・文王有声》の詩では、文王、武王が豊、鎬に遷都し、周王朝の発展に大いに貢献したことを褒め称えている。中には、“文王は命を受け”“豊に於いて邑を造りけり”と賛美した後、“滅に城を築き、匹に豊を造りけり”、“豊之垣とする”と記されている。これらの詩から、豊京には城壁と城を守る堀があったことがわかる。続いて武王が鎬京を建設した話になると、“トを考し、王となり、宅、是鎬京なり。亀を以て之を正し、武王、之を成す”と記されている。ここからは武王がかつて亀甲占いによって、鎬京という吉祥の地を選び、新しい都を築いたこと、また鎬京建設は計画された事業であったことがわかる。その宮室（宗廟）の分布は、考古の発掘により、豊京の場合は城内の東、鎬京の場合は城内の西に在り、いずれも澧河に近いことが考えられる。また貴族の墓地や冶金、陶器の作業場は、豊京の西と鎬京の東に分布していた。宮殿の建築の配置は、考古の発掘によって明らかになった西周初期の周の都である岐邑鳳雛村の甲組宮室建築の平面配置から手がかりをつかむことができる。建築物は北側にあって、南向きで、大門の外には彩壁がある。大殿が真中に在り、その他の玄関、廂房（母屋の前方両側の棟）、中庭（院）と奥室は、いずれも玄関と廊下を形成する中軸線に沿って、左右均衡で、対称に配列され、極めて規則的である⁵。この建築物は武王が商を滅ぼす前のもの⁶で、豊、鎬二京の宮室、宗廟の建築時期と相前後する。故に豊・鎬京内の宮室、宗廟建築のレイアウトは、これに似たものと考えられる。豊京・鎬京城内の配置に至っては、春秋戦国時代の《周礼・考工記》が記す“匠人が国を営み、方九里、傍に三門あり。國中、九經九緯とし、経の途（幅）を九軌とす。左は祖廟、右は社、后市に面する”の様式で計画し造られている。中国の都城発展の歴史から見ると、元代の都一大都を営造するまで、《周礼・考工記》が規範とする都城の理想的な様式で建築された都城がなかったことが分かる。故に西周の豊、鎬二京がその境地に達するのは難しかったのである。

豊、鎬京遺跡から判断できるのは、城壁や堀が築かれたこと、また城内には宮殿、宗廟、王室、貴族の墓地や幾種にも及ぶ器物の作業場があったこと、宮殿や宗廟の平面配置などである。これらは明らかに、周王室と貴族が作り上げた強い王権思想及び「王権天授、敬天法祖」（王権は天により授かる、天を敬い、先祖を法る。）などの思想によるものであり、古代支配者が確立した“城を築き君を衛り、廊を造り、民を守る”⁷という築城の理念を反映したものである。

5 陝西周原考古隊：《陝西岐山鳳雛村西周建築基址簡報》、《文物》に1979年第10期に記載。

6 張洲《周原環境与文化》、三秦出版社、1998年出版、231ページ

7 《吳越春秋》卷五

2. 秦の都——咸陽

戦国時代の後期、秦の献公は、紀元前384年に即位した後、政治に精励し改革を始めた。即位二年目（紀元前383年）、河西の国土をめぐる魏との戦争を指揮するため、櫟陽（現在の西安市閻良区武家屯など）に遷都した。この頃から秦は日増しに強くなってきた。しかし櫟陽は臨時的な都であったため、城壁や宮殿営造は粗末だった。そのため、息子の秦孝公は王位継承後十二年目（紀元前350年）に、商鞅の提案を受け入れ、都を櫟陽から咸陽に遷した。咸陽が新しい都として選ばれた主な理由は、咸陽が関中盆地の中心部に位置し、土地が広く、また渭水にも隣接し、水陸交通の要衝となっていたからである。秦孝公の遷都は、後に秦を強大にし、ついには関東の六国を制し、中国全土を統一し、封建帝国秦王朝を築くのに、重大な役割を發揮した。同時に咸陽も、秦の群雄撲滅戦争に伴い、日々増築され、紀元前207年の秦王朝滅亡に至るまで、都咸陽の拡張工事が終わることはなかった。そのため、秦の都咸陽は実際、渭水の南北兩岸をまたぎ、東西は二百里にもわたる空前の規模の、未完成の東方の帝都であった（図2：秦の都咸陽の分布略図）。この主な原因は、秦の始皇帝、秦王嬴政が、中国の歴史において初めて全国統一を成した皇帝として、首都咸陽の建設において、自分の天下君臨の“天子”としての最上の地位を示すために、咸陽を“天子の都”に築きあげたいという強い思いを反映したものであった。そのため、咸陽の造営は、並々ならぬ気迫が漂い、人民の力を惜しまず、世の中を驚かせたことも少なくなかった。たとえば、全国統一戦争の最中に、“諸侯を破るたびに、その宮室を書き写してから破壊し、これを咸陽の北部に造らせる。南は渭水に臨み、雍門より東、涇水、渭水に至り、宮殿は道を覆い、楼閣は立ち並び、戦争で捕獲した諸侯の美人をここに住ませ、戦利品の鐘、太鼓をここに飾る”⁸とある。秦王朝建国後、始皇帝27年（紀元前220年）、渭水の南に信宮を造り、後に極廟と改名し、天の極を象る；また極廟から驪山まで道を通し、甘泉前殿を造った。さらにここから咸陽までの甬道（石畳）も築いた。後にまた始皇帝35年（紀元前212年）に、渭水の南の上林苑で宮殿を営んだ。まずは前殿として阿房宮を造り、その規模は広大で、一万人も収容できるくらいであった。その周囲に閣道を設け、宮殿から南山をつなぎ、南山の頂を望楼とした。同時に複道を築き、阿房宮から渭水を渡り、咸陽まで続くようにした。更に命令を下し、咸陽から二百里以内に宮殿楼閣二百七十軒を造らせ、いずれも複道（複線）、甬道でつなぎ、帳幕で飾り、宮殿に美女を住まわす⁹。上述した史料からも秦の始皇帝は咸陽の建設に際し、決して思いつきではなく、計画的に咸陽宮を中心として複道、甬道で各宮室、宗廟をつなぎ、統一された開放的な一体型の宮殿群を形成したのである。その指導思想は、正に《三輔實図》が示すところの、“始皇帝は天下を統一し、都を咸陽にし、北の陵に依って宮殿を造らせ、端門は四方に達し、則紫宮を以って帝居（天帝が住むところ）とす。渭水が都を貫き、天漢（銀河）を象り、渭水の南まで渡る橋を造らせ、是を以って牽牛（が渡る鵲橋）を似せる。”つまり、“天を象り、地に法る”、“人神一体”の思想によって煌煌たる帝居を造り、これを以って天帝が住む“紫微宮”と天上の“銀河”、“鵲橋”

8 《史記》卷六《秦始皇本紀》

9 《史記》卷六《秦始皇本紀》

に似せたのである。その目的とはやはり“天、地相通ず”、“天人感応”の皇権思想を広め、始皇帝から始まり万世にいたるまでの封建支配を維持することにある。

3. 西漢の長安城

西漢の長安城は、秦末戦乱の後、項羽が秦の都咸陽を焼きはらった後に建てられたものである。当時、漢の高祖劉邦は、婁敬と臣下張良の提案を受け入れ、洛陽を放棄し、西に関中を都にした。丞相蕭何は渭水南部の龍首原西北坡の新都建設に任命された。当時は経済力がなかったため、まず秦の興楽宮を基礎として長楽宮を建て、後に秦の章台を基礎として未央宮を建てた。未央宮建設に際して蕭何は皇帝に“重い威厳”を与えるため、意図的にその規模を拡大し、当時の財力を尽くして、壮麗な宮殿を建てた。そのため、未央宮は、高祖の死後、長楽宮に取って代わり、皇帝の居住地となった。後の恵帝劉盈元年（紀元前194年）に城壁を建築した際、長楽宮と未央宮が龍首原頂部に位置していることを鑑み、皇宮の安全を守り、皇権尊重を示すため、秦漢時期の天文と風水の学説を受け入れ、長安城を龍首原頂部から西北に向けて渭水の両岸に隣接するところまで伸ばし、城壁で宮殿を囲み、地形と河岸の制約により、東壁は平らでまっすぐにのびているが、他の三面はところどころ曲がっていた。後の人々はその形状が天上の北斗星と南斗星に似ていることから、長安城を“斗城”とも呼んだ。実際、このような配置は、意図的に長安城内の正殿—未央宮を、都の西南に位置させ、その目的は後漢の張衡が著した《西京賦》で指摘したように、“正紫宮於未央、表峽闕於閭闔。”（紫宮を正に未央とし、表に高い櫓を建てて閭闔とする。）何故なら“天に紫微宮あり、王者の象徴なり。紫微宮門、名は閭闔と言ひ、宮門に櫓を立てて表とす。峽とは高遠なり。”¹⁰《辛氏三秦記》には、未央宮は別名を紫微宮という、とある。これも、人と神が共存し、天人感応という皇権思想の現れであろう。

漢の武帝劉徹は即位後、国力の増強に伴い、長安城内に桂宮、明光宮を増築したうえ、長安城西壁の外に、その規模が未央宮をはるかに超える、別名“千門万戸”の雄大な建章宮を建設した。その雄大さの一つとしては、南北城門の高さが25丈にも及ぶことが挙げられる。正面の南門には三階建ての門楼が建てられ、空を飛ぶような回廊が設けられ、城壁を跨ぎ、未央宮に直結している。後世の人はこれを、漢の武帝が皇帝の威厳、行動を示すための、贅沢極まる御殿だと指摘した。また漢の武帝は、“儒術独尊”の考えを示すため、長安城の南郊外に礼制建築の明堂と辟雍を建てた。しかしこれらの礼制建築は、西漢末の王莽政権時代になって、復古の思いを実現するため、初めて古代の礼制に基づいて正式に建てられたものである。新莽の地皇元年（20年）、王莽は再び南の郊外で九つの大規模な廟を造った。しかしこの廟に祭られているのは西漢の諸帝ではなく、王氏の祖先であった。

漢の長安城には宮殿、官署のほか、上皇廟、太祖廟、恵帝廟、顧成廟などの宗廟建築があり、合わせて城面積の三分の二をも占めた。その他の部分は平民の居住地や商売の市であった。史籍の記載によると、城内には八つの街、九つの陽、九つの市と160の部屋があったという。ここからも、平民の居住区が狭かったことが伺える。また漢の長安城は全体的な計画もなく、徐々

10 《文選》巻二《西京賦》に付されている李善の注釈。

に建築していったので、平面のレイアウトがよく整っていないことがわかる（図3：西漢の長安城図）。

4. 隋の大興城及び唐の長安城

唐の長安城は、実際は隋の大興城の平面レイアウトを踏襲し、それに修正を加えたものである。唐の長安城の規模は大きく、配置は整い、中国の歴史においても都市建築の傑作と言えるだろう。

隋の大興城は、隋の文帝楊堅が全国を統一した後、もともと居住していた漢の長安城が頽廃し、水にも塩分が多かったこともあり、また漢の長安城の営造は、“計画を無きにし、亀・筮トもせず、陰陽風水も問わざなれど、帝王の邑を建てるに足らぬ”¹¹と批判し、新しい王朝の雄大な雰囲気と帝王の尊厳を示すため、即位した翌年、つまり開皇二年（582年）の六月に、勅令を出し、太子左庶子の宇文愷に首原南で新しい都建築を監督するよう命じた。宇文愷はこの使命を果たすべく、まず洛陽と鄴都まで視察に行き、北魏の洛陽城と東魏、北齊の都、鄴の南城のレイアウトを鑑み¹²、また都の所在地である六条東北—西南の岡埠を利用して、きめ細かに設計した。宋代になると、宇文愷は《周易》の八卦学説を大興都設計の指導思想とし、この六条の岡埠を乾の六爻とみなし、“故に九二に宮を置き、帝王の居に当て、九三に百司を置き、君子の数に应じる。九五は尊い位で、常人の居るべからず、故に玄都観、興善寺を置き、以ってこれを鎮める”¹³、と指摘する人も現れた。この設計の思想は、《周易》の八卦学説にこじつけたが、地形の特徴を実に巧妙に活かし、皇宮、官署、寺廟などを城内の高地に配置させ、安全を確保しながら、帝王や官僚たちの高貴な地位と威厳を高めた。同時に城全体の建築物と各種の設備に高低感をもたせることによって変化に富ませ、城内に氣勢と色彩を漂わせた。このほか、宇文愷のもう一つ重要な設計思想は、建物の配置が、左右対称で、中軸線の位置が突出していることである。これは宮城、皇居、外城の城壁の方向、長さ、城門の位置及び道路、里坊の配置にも表れている。宇文愷の三番目の指導思想とは、《周礼・考工記》が規定する原則である。例えば“傍三門”、城内“九經九緯”、“左祖右社”などはできる限り実施させ、例えば“面朝后市”に関しては、宮城は“九二”の高地を占め、全城の北端に位置するため、実現することはできなかった。また特に記しておかなければいけないのは、大城内の里坊の設計が十分整えられていたことである。各里坊の配置は、考古発掘と実測によってすでに横長の長方形であることが判明した。皇城の南、縦四、横九の36坊の面積が最も小さい。“泄氣”（気が漏れる）、北に位置する皇城と宮城の風水を悪くするのを防ぐため、各里坊は南北に門を設けず、東西だけに門を開いている。宮城と皇居の東、西側にはそれぞれ縦三、横十三の39坊が設計されている。東、西市はそれぞれ2坊、外城内の東南の角にある曲江芙蓉園風景区は1坊を占めたゆえ、実際には西城が37坊、東城が36坊、計73坊で面積が広く、四方に各一つの門を開けているのである。城の中は、皇居である内昭陽門街と外城朱雀門街を南北の中軸線とし、東、西市と各里坊はそれぞれ対応し、規則正しく整っている。

11 《隋書》卷一《高祖紀》

12 陳寅恪：《隋唐制度淵源略論稿》重慶商務印書館、1945年版、78ページ

13 《唐会要》卷五十《玄都觀》条。

隋の大興城は、宇文愷が事前に制定した具体的な計画に基づき建設が進められ、開皇三年（583年）に完成した。隋の文帝はその後、都を大興城に遷した。しかし時は長く続かず、隋はついに滅び、唐王朝が起り、大興城は唐の都となり、長安と改名された。唐王朝が支配した300年の間に、一部の宮殿と付属した各県の名称は変えられ、“里”が“坊”になった以外での大きな変化は、唐の太祖の時、宮城の東にある北城外の龍首原に六明宮を建設したこと、唐の玄宗の時代に、もともと住居していた隆慶坊を興慶宮に変えたことくらいである。その他、小さな変化はあるものの、城市全体のレイアウト、つまり城全体が外城、宮城、皇居の三つから構成されていること、外城が朱雀門大通りを軸線とし、109の坊と東、西市が対称に配列されていることなど、基本的な構造は変わらなかった（図4：唐の長安城図）。

全体から見れば、宇文愷の都城設計思想の核心は、皇権を守り、できる限りそれを突出させることにあった。帝王が居住していた宮城に重きを置き、宮城の位置を漢の長安城に倣い、都の南部から城内の北端に置いた。これは曹魏の都一鄴の北城と東魏、北斉の都一鄴の南城の造り方を採用しているが、宇文愷が新しい都を設計した時は、新しい創意を盛り込み、古代の人の「宮城が北に位置し、天室に象り、宮殿を高く築き、神居に類似させる」及び「南向きに立てる」、¹⁴「南に面して天下を聴く、向明にして治める」¹⁵などの帝王支配理念を完全に再現した。また、唐の長安城の設計は、歴代の封建帝王が追い求めた地上の天室、人間界の仙居を実現させたため、その設計思想及び都市の配置、構造、建築様式は、後世及び域外にも大きな影響を及ぼした。例えば渤海国の上京龍泉府（現在の黒龍江省寧安県渤海鎮）、明の北京城及び日本の平城京や平安京などが挙げられる。

III 区域中心時期における西安城

唐末の戦乱、特に唐王朝を転覆した后梁皇帝朱温が、唐の昭宗に洛陽遷都を迫った時、長安の住民に“籍に基づき遷居する”と厳しく命じた。宮殿の官邸を全てとり壊し、木材を“渭水で清し、川を下り”洛陽まで運送した¹⁶。この破壊的な取り壊しにより、壮麗で賑やかな長安城は廢墟となった。この後、宋の太祖趙匡胤、明の太祖朱元璋は、長安を都とする議を結ぶものの、諸々の事情により実行できなかった。長安城は再び都にはならなかったが、五代十国、北宋、金、元、明、清の各時代において終始、関隴地方の政治の中心であった。また各王朝が西北を鎮め、西南の軍事を統括した軍事的な要地でもあり、交通の要衝でもあった。そのため、北宋と金朝が西安において管轄した地域を、唐時代では京兆府と呼ばれたように、京兆府城と呼んでいた。歴代の支配者は、皇室の人間、或いは功労のあった重臣を西安に派遣し、駐在させた。例えば元の初期、フビライが南宋を滅ぼし、元王朝を建てた翌年、つまり至元九年（1272年）に、彼の三番目の息子マンカツを安西王に立てた。後に、それまで通用されていた京兆府と京兆府城も、安西府と安西府城に改名された。その目的は、やはり安西府城の重要な地位を利用し、西北と西南を安定させることに

14 《礼記》

15 《周易・説卦》

16 《旧唐書》卷二十上《昭宗本紀》

あった。皇慶元年（1312年）に、再度奉元路と奉元路城に改名されたが、その重要な役割は変わらず、依然として元が西北と西南を支配するための大本拠地であった。明王朝成立後の洪武二年（1369年）に奉元路城が落とされ、奉元路と奉元路城は西安府と西安府城に改名された。翌年、明の太祖朱元璋は、二番目の息子朱棣を秦王に任命した。明の太祖はかつて二回、西安遷都について言及した。ここからも、明の太祖が西安を如何に重視していたかが理解できるだろう。その後、西安遷都の論議は果たせなかったが、朱棣は洪武十一年（1378年）に領地に就任した。明代の藩主は地方の軍事を制約する権利を持っていたため、朱棣の西安入りによって、事実上、朝廷による西北、西南地方への守備が強化された。これは清代になっても同様であった。清王朝は順治二年（1645年）に西安を攻め落とし、大量の満州騎兵と漢軍を派遣し、西安府城に駐在させた。また城内にある明の秦王府を取り壊し、八旗官兵の駐防城に作り直した。つまり満城である。また城内の東南の隅に漢軍の駐防城を建て、南城とした。満城の面積は城全体の三分の一を占め、西安府城はほとんど兵舎となった。ここからも清王朝が、西部領土を守る上で、西安府城の存在を重視していたことがわかる。もちろん、政治、軍事面においての重要な役割以外に、西安は西北地区において最も主要な経済都市であった。西安は長期にわたり都城となり、文風も豊かで、西北地方の文化の中心地でもあった。

西安の地位と役割における変化に合わせて、西安城は唐末の廃墟から徐々に再生と発展を遂げた。唐末から清末にかけての約千年の間、王朝の変化に伴い、その城市の規模と平面の配置は下記のような発展段階を経てきた。

五代時代の新城。唐末天佑元年（904年）唐昭宗が洛陽に遷都した後、長安に新しく設けた佑国軍節度使韓建が元長安城の皇居を基に立て直したものである。面積は唐長安城の僅か十六分の一であり、規模は大いに縮小された。それと同時に城内に内城を建て、官府の所在地とした。また東西の城壁にそれぞれ小さい城を造り、管轄下の大年県、大安県（後にそれぞれ元の名である長安県、万年県にもどった）の議事場となった。この新しい城は、軍鎮（軍事基地）のみの機能を備えていた。

北宋、金時代の京兆府城。北宋と金代において、新城では唐代の旧称である京兆府の治所が復活した。またこれを京兆府城と称した。城内外の全体の配置は五代の新城と似ており、特に大きな変化はない。同様にこの両代においては、西夏国と対峙する上で指揮の中心となっていたので、軍鎮としての性格が強かった。城内官署、市厘と居住区が交錯して分布しており、同時に多くの宗教の寺、廟が城内に混在していた。

元時代の奉元路城。（前期は安西府城という。）城の規模と配置は、前の時代と基本的に同じだが、至元十年（1273年）に、城の東北にある滻河一帯の高台で安西王宮を建てた。その面積は約0.3平方キロで、縦長の長方形を成している。イタリアの旅行家マルコ・ポーロは、旅行記の中で、安西王宮の城壁が高大で、宮殿は絢爛豪華、部屋がすべて金の絵で飾られ、四方には湖、川、泉などが流れ、軍隊が近くに駐在し、狩り遊びをするのにもってこいの土地だと賞賛している。

明の西安府城。明の西安府城は前の時代を基礎に拡張と増築を行った。まず明初期の洪武七年（1374年）に北、東の城壁をそれぞれ外に三分の一延長し、城内の面積をもとの5.2平方キ

口から倍近くの7.9平方キロまでに拡大した。また、城壁を高くし、補強して、屯兵や安全護衛を有利にした。次に、城内中部の北側に秦王府を建てた。その構造は二重になっており、内城の外側に更に城壁を設けていた。王府は全体の八分の一の面積を占めていた。さらに明の神宗万曆十年（1582年）に、鐘楼を元の場所である迎祥觀から現在の場所に移し、鐘楼を中心に、東、西、南、北の四方向に大通りが伸びる街作りができた。また、防御の強化や商業貿易の発展に適応するため、四面の城門の外で関城を増築した。そのうち、東門外の東郭新城が最も大きかった。拡張し、増築を経た明の西安府城は、その後、六百年の時を経て今日まで残ってきた。これが現在の西安古城である（図5：明の西安府城図）。

清王朝の西安府城。前述の通り、満族によって建国された清が中原地方に入り、順治二年（1645年）に西安を占拠した。その後、政権を固め、西北・西南への支配を強めるため、西安府城内に大量の満族と漢民族の軍隊を派遣した。また明時代の秦王府を解体し、満族、漢民族の兵士達が駐屯、防衛のための満城と南城を建てた。この満城と漢城だけで全体の三分の一も占めていた。これは清王朝が西部地方における西安府城の軍事戦略上の地位を重要視していることを示しているが、西安の都市発展史においては、これは大きな後退であった。城内の西の半分には、明時代の古い規則が色濃く残り、同時に鐘楼を中心とする東、西、南、北の四通りが四つの城門までに通ずる配置が保たれている。清王朝後期になると、経済と商業貿易の発展に伴い、東城門外の関城が再び繁栄を見せたほか、北、西、南の城門外の関城も拡張された。

国内外の歴史からみれば、人類の生活上の需要と経済活動が社会発展の原動力になることは明らかである。上述した王朝と政権の支配時、西安城は地域的政治中心地と軍事的な要地としての役割を果たした以外に、社会の安定と経済の発展に伴い、城内と関城内では、手工業作業場と市井の店舗が日増しに多くなった。商業貿易の内容と規模は拡大を続け、西安城は西北地方の経済の中心地となり、経済的な繁栄を極めた。これは明清時代において特に顕著であった。例えば、城内の隅々まである様々な商品の市場、商店及び多くの商人会館などはその一例である。経済の繁栄と共に、明、清時代に、西安府城には多くの書院、塾、貢院が現れ、また多くの寺院や祠堂、廟も立ち並び、文化的要素は極めて濃厚で、古都の雰囲気も漂わせている。

IV 近代化と現代化に向けて変りつつある西安

1911年10月10日、辛亥革命が勃発し、満族による清王朝がこれで幕を閉じ、二千年余り続いてきた封建制度が終りを告げ、中華民国が成立した。国全体が近代化に転換しようとしていた時、西安の都市建設と都市景観も新しい変化を見せた。中国の近代化は1840年のアヘン戦争以後に既に始まっていたが、その歩みは遅かった。同治八年（1869年）、左宗棠により、初めての機器局が西安府城で開設された。また光緒年間（1875—1908年）にも病院、新式の学校、新聞社、図書館、郵政局、銀行、“舶来品商店”、工場などが続々と開設された。中華民国建国後、近代化への歩みは少し速くなった。城内の一大変化は満城をつぶし、都市発展の桎梏が解除されたことである。1927年、西安市制が実施され、翌年、西安市政府は廢墟となった満城を新市区として規定し、碁盤の目のような道路と街を建設する計画を立て、工場や商店を開設した。1931年“九・一八”事件後、日本は中国の侵略を進め、国民政府は国の安全をは

かるため、“長安を臨時首都とし、西京と名づく”ことを決め、西京籌備委員会を成立した。その後作成した西京都市計画は、欧米などによる都市計画の経験に基づき、民間の提案を取り入れ、西京は“周、秦、漢、唐の四代古都であった”旨を明確にし、歴代の文化財・旧跡を保全し、“漢・唐時代の繁栄を復活させる”ことを強調した。1937年の“蘆溝橋事件”（七・七事変）後、日中戦争が全面的に勃発し、西安は西北地方の内地に位置していることから、国民政府に準都と指定された。また1934年末、隴海鐵路が西安まで敷設され、1935年の元旦に正式に鐵道が開通した。これにより、人口、政府機関、工場、商店の数は急増し、近代化の足並みも更に速くなってきた。民国時代に前後して決められた二つの西安都市計画の内容は、西安の歴史・文化の伝統を重視することのみならず、西洋の現代都市計画の理念をも吸収し、文化財や旧跡を保全し、都市機能を完備し、城内と郊外の居住環境改善などに幾つかプラスの面があるものの、その後の戦争などの影響により、実施には至らなかった。

1949年10月1日、中華人民共和國が成立した。ここ半世紀の間、すなわち50年代初頭、70年代末、90年代の半ばに制定された三つの西安都市総合計画の方針を通して、西安の都市建設は近代化への転換がはかられ、現代化都市建設への一步を踏み出した。

1953年、西安市は工業化建設において、重点都市の一つとなった。旧ソ連の都市計画理論と方法を参考にしながら、《西安市1953—1972年都市総合計画》が制定された。この計画では、西安の都市性能を、“輕量精密機器の製造と紡績工業都市”と定めている。また都市部は旧城を中心として、主に東、西、南の三つの方向に拡張する。また唐の長安城と明の西安城の配置を継承し、中軸線を守り、碁盤の目のように広がった道路を組み込んでいる。この計画は指導思想に問題がある上に、“文化大革命”の影響も受け、都市インフラ及び市民の住宅建設が大いに停滞した。第三産業が縮小し、文化財や名勝旧跡も大量に破壊された。一方、西安地域の現代工業はこれにより大きな発展を遂げ、西安市は新しい工業拠点となった。都市部も四方に大きく拡大し、東郊外には紡績タウン、西郊外には電気工業タウン、南郊外には文化教育区、北郊外には倉庫区、旧城内には行政と商業区が設けられ、機能的な区画が行われた。

1979年には新しい經濟發展の需要に応え、西安市政府は《西安市1980—2000年都市総合計画》を制定した。その計画における目標とは、古城としての風格を保ち、紡績、機械工業を主とし、科学研究、文化教育、觀光業が発達した現代都市となることである。計画では、旧城は保全と改造の重点地区として、文化財、古い建物や歴史的に価値のある民家を保全し、住民のために、一部都市計画に添わない古い建物を改造することを計画している。また文化財と觀光名所に対し、“保存、保全、復原、建替と新規開發を通じて、都市建設と旧城の伝統的特色を一体化する”という原則を打ち出した。緑化区と觀光コースを結び、点、線、面から、唐時代の長安城の輝かしい姿と明時代の西安城の古く、素朴で慎ましい雰囲気表現する。この計画方針のもと、西安市のインフラと觀光、飲食などの第三産業は大きな發展を遂げ、従来の閉鎖型から對外開放型へと変貌しながら、東南、西南に向け、大きく發展した。1985年、都市部は1957年の100平方キロから160平方キロへと拡大した。さらに1991年に、南郊外と北郊外に先進技術開發区と經濟技術開發区を建設した。斬新な雰囲気と長い歴史に培われた古都の風貌が美を競い合い、生彩を放っている。

前世紀90年代なかば、国が力を入れて進めてきた西部大開発の戦略に合わせ、また新世紀における西安の経済と社会発展、そして都市の現代化建設に向けた準備を進めるため、西安市政府は1996年に《西安市1995—2010年総合計画》を制定した。新しい計画では、西安の都市性能を以下のように位置付けている：“西安は世界的に有名な歴史的な町であると同時に、我が国の重要な科学研究、高等教育及び先進技術産業の基地でもある。北方の中西部地区と隴海蘭新鉄道網における最も規模の大きな中心都市である。”同計画では、今後は西安市を歴史・文化の町として保ちながら、科学技術、観光、商業貿易を先導とし、経済構成を最適化し、電子、機械、軽工業の改組改造を促進する。先進技術産業と第三産業を発展させ、西安市を経済の繁栄、都市機能の完備、美しい環境、独自の歴史・文化を保ちながら現代文明が輝く開放的な都市になるよう、世界一流の歴史の町と観光地、そして現代化が進んだ国際都市になるようにと、大きな目標を定めている。

V まとめ

西安の三千年にわたる都市発展史を見渡すと、前期二千年は、西周の豊・鎬の都市建設から、秦の始皇帝が建てた“弥山跨谷”（山を覆い、谷を跨る）の大帝都咸陽、さらに封建社会の上昇期における西漢帝国の都長安の建設、唐代における“天可汗之都”など、長安城の空前の発展やその都市建設の規制は、いずれも中国都市としての建築風格があり、国内外にも大きな影響を及ぼした。中期の唐から清王朝末までの千年の間で、都にはならなかったものの、中国西北地方、西部の政治、軍事の中枢であり、経済の中心でもあった。都市の規模とレイアウトはこの変化に適応し、回復と発展を繰り返しながら、地域の中心としての役割を發揮し、歴史の名都としての風韻を保ち続けた。後期は百年近くの民国と共和国の時期であり、戦争と社会動乱を遍歴したが、西安の都市建設は困難の中、近代化への転換が完了し、現在は、国際都市に向かって邁進している。三千年にわたる西安都市の変遷と発展を通して見れば、我々はこれらの歴史的変化を促進した思想、精神的要素は、やはり内容が豊富で、伝承し続けられる中華文化にあると分かるだろう。現代になっても、経済の発展と環境保護、歴史・文化の風采と独自の個性を保つという難しい問題に直面しているため、都市計画の建設とその管理において、多くの先進国の計画理論や建設技術（例えば中央集約、適度分散型の解放式平面配置及び現代の便利なネット構造など）を鑑みて、参考にしてきたが、中国伝統文化の中の天人一体、緑豊かな城市を造り、歴史、文化を守り、人と自然、人と人の共存を実現する理念などは、今もこれからも、精神的な支えと具体的な指導として大きな役割を發揮するだろう。新世紀において、中国伝統文化の風韻を備えながら、現代化の息吹に溢れ、国際都市としての品格をもつ西安市が、徐々に完成され、世界の東方に聳え立つ存在になることが十分に予測できる。

主な参考文献

- 史念海主編：西安歴史地図集、西安地図出版社、1996年
馬正林：豊鎬—長安—西安、陝西人民出版社、1978年

王学理：秦都咸陽、陝西人民出版社、1985年

張洲：周原環境与文化、三秦出版社、1998年

葉驍軍：中国都城發展史、陝西人民出版社、1988年

朱士光主編：古都西安の變遷与發展（近日出版予定）、2002年

任雲英、朱士光：跨越3000年の古城西安之發展變遷（近日發表予定）、2002年

西安市地方志編纂委員會：西安市志（第一卷）・総類、西安出版社、1996年

馬正林：西安；載陳橋驛主編：中国六大古都、中国青年出版社、1983年

史念海、辛德勇：西安；載陳橋驛主編：中国七大古都、中国青年出版社、1991年

朱士光：論漢唐長安文化之内涵与特征、中国古都研究に記載、第十二輯、山西人民出版社、1998年

朱士光：初論我国古代都城礼制建築的演變及其与儒学之關係、中国古都研究に記載、第十四輯、三秦出版社、2000年

添付図目録：

図1：西安地方の各時代における城址の變遷略図

図2：秦の都咸陽の分布略図

図3：西漢の長安城図

図4：唐の長安城図

図5：明の西安府城図

謝辞：本稿に添付された五つの地図は、『西安歴史地図集』等の論著を参照し、関係地図及び史料に基づいて、陝西師範大学西北歴史環境と経済社会發展研究センター数字地図室孫建国氏によって作成された。資料収集の協力は蕭愛玲講師、英文要旨の校訂は嚴艷副教授、原稿入力は李淑瑜氏を煩わした。各位に感謝の意を表したい。

訳注：

①「西漢」は日本では一般に「前漢」、「東漢」を「後漢」とも言う。ここでは、五代の「後漢」（947－950年）と区別するために、「西漢」と言っている。

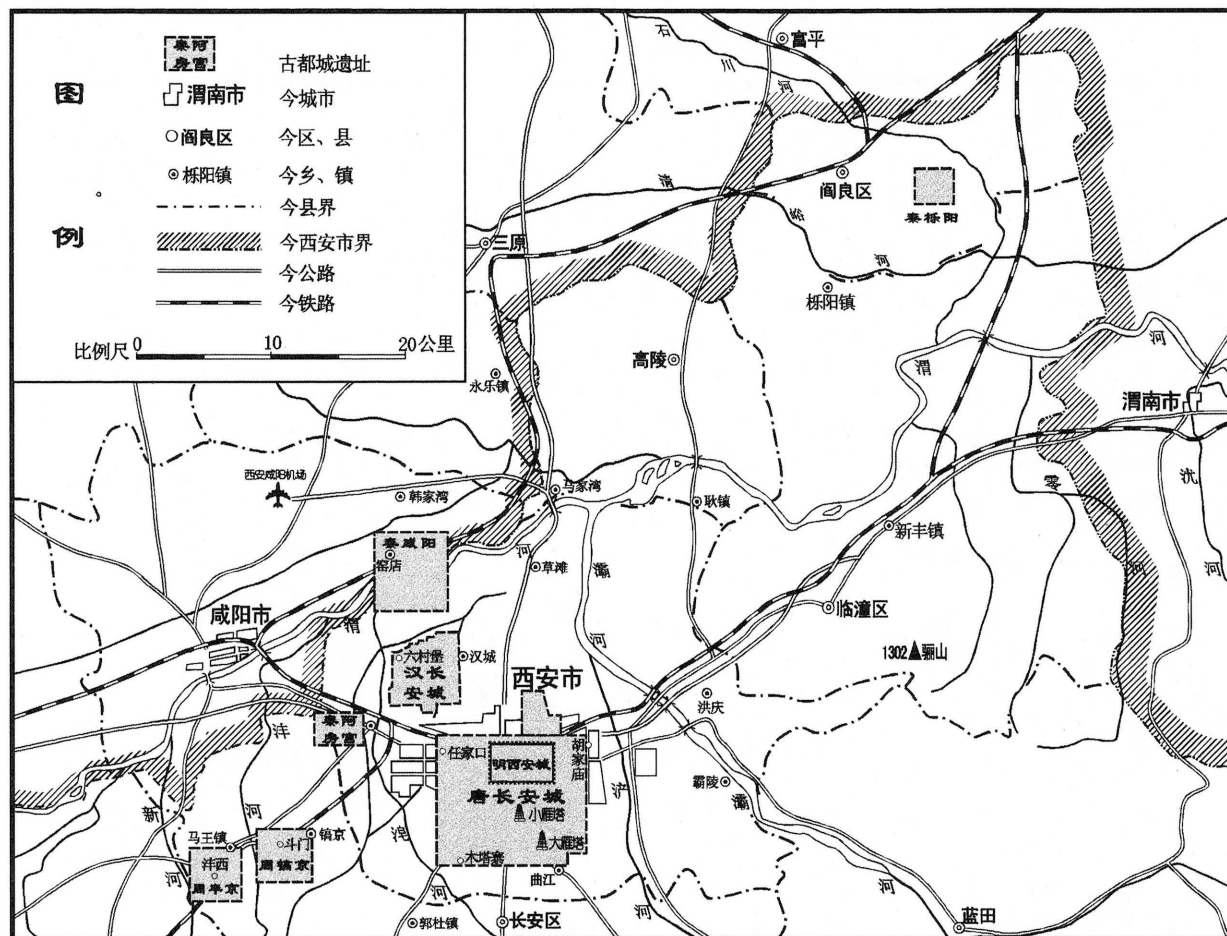


图1 西安地区历史时期城址变迁示意图

The sketch map of the change ob the city's address in ancient times in Xi'an region

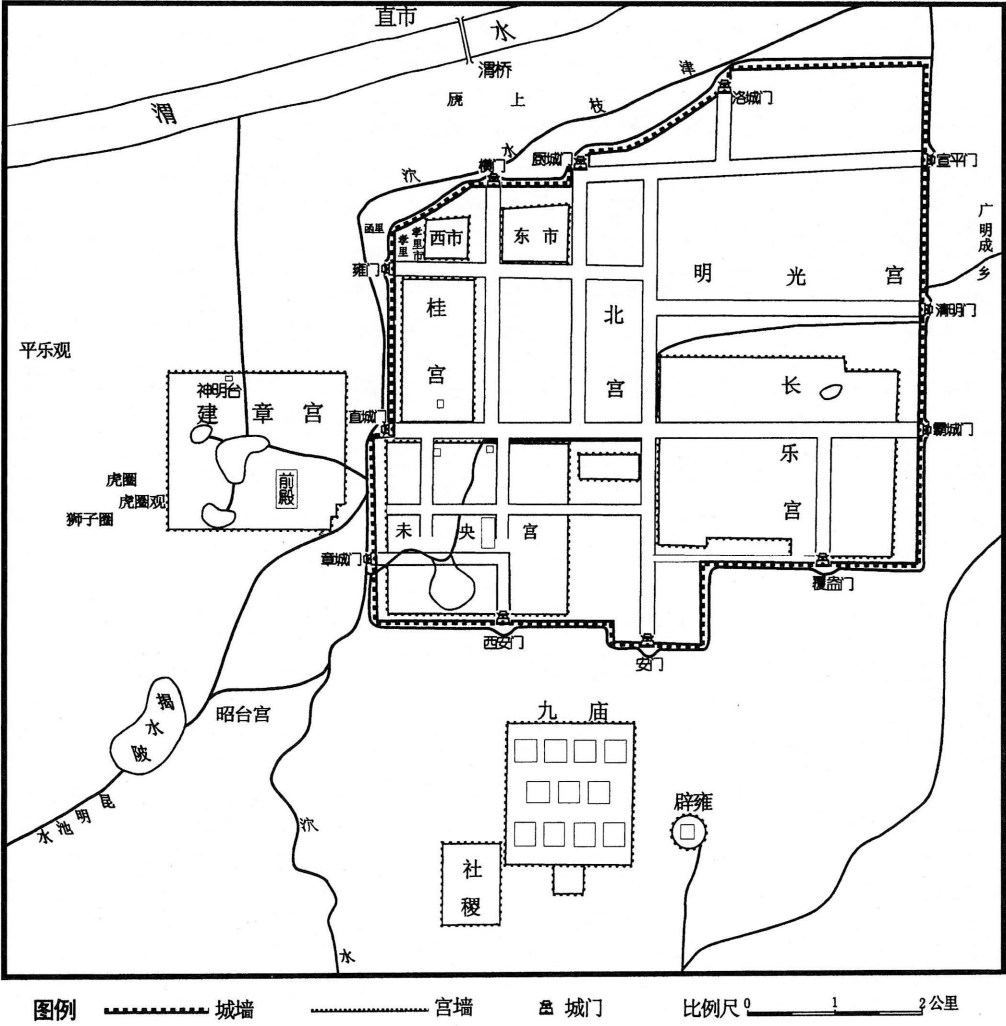


图3 西汉长安城图

The map of Chang'an city in Western Han Dynasty

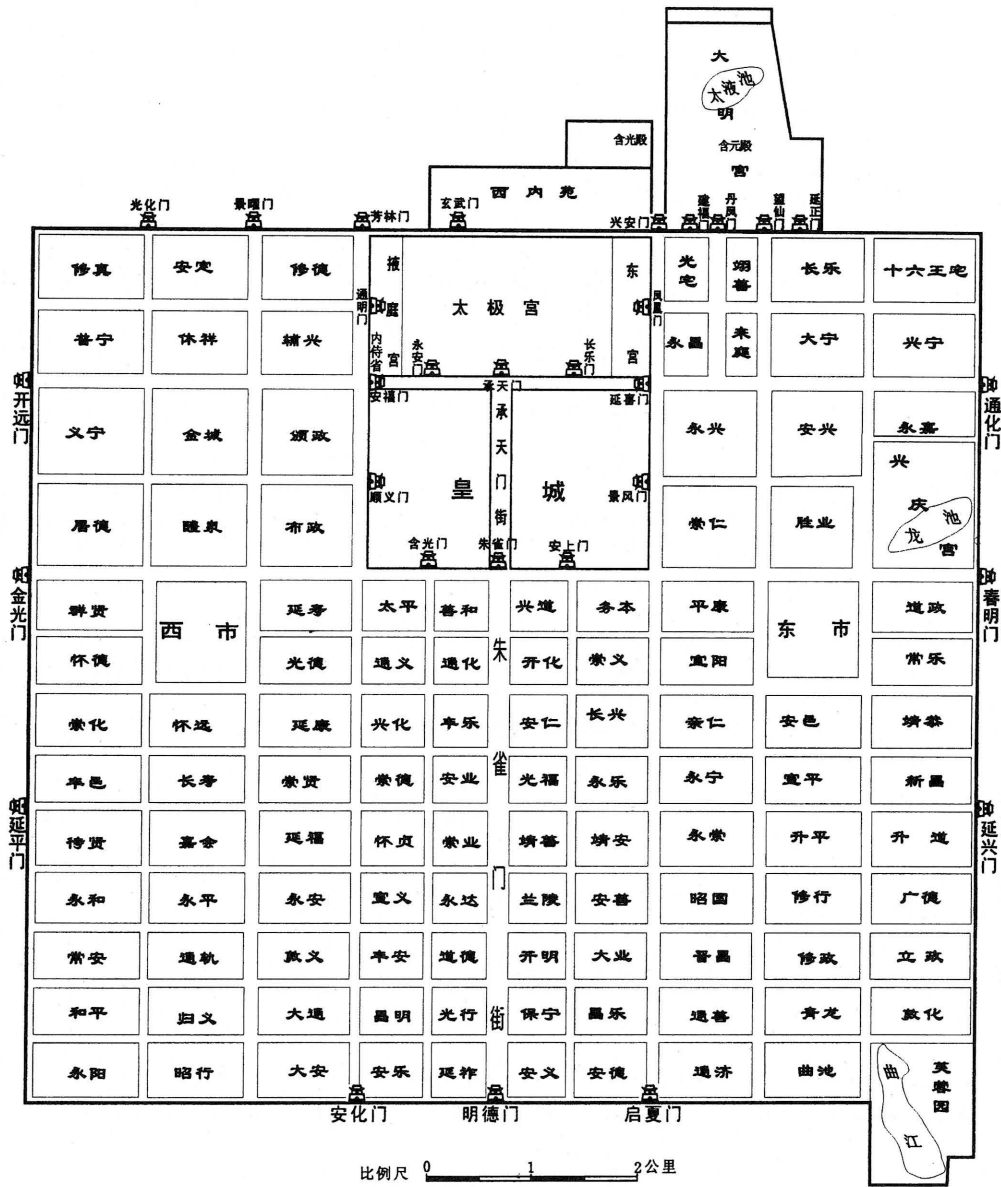


图 4 唐长安城图
The map of Chang'an city in Tang Dynasty

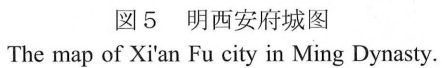


图5 明西安府城图

The map of Xi'an Fu city in Ming Dynasty.

【Abstract】

Xian is an ancient capital well-known at home and abroad, with a history of over 3000 years divided into three evolutionary phases. The first phase, the period as the capital of the empire, lasted from 1059 B.C., when Wen-wang of the Zhou dynasty built the government in Fengjing, until A.D. 904, when the Tang dynasty collapsed. During this span of nearly 2000 years, 16 dynasties, or regimes, including the Western Zhou, Qin, Western Han, Sui, and Tang, founded their capitals. Xian was the seat of government during as many as 1133 of these years. The second phase, the period as a central provincial city, began in A.D. 904, the end of the Tang dynasty, and ended in 1911 with the fall of the Manchurian dynasty Qing. This period of over 1000 years saw the reigns of several dynasties or regimes, among them the Five Dynasties, Northern Song, Jin, Yuan, Ming, and Qing, all of which, however, always acted only as administrative, economic, and cultural centers in northwestern China, more precisely the western region. The third phase is the period of evolution to a modern city, lasting over 90 years, from the 1911 Revolution until the present day, which has been described as the modernization of the Republic of China and the founding and construction of the modern state of the People's Republic of China.

This text discusses the form of the city and the functional roles that were shared among districts, together with changes at each juncture of the three historical phases mentioned above. It also examines how these changes related to the replacement of dynasties, transition of systems, development of economic society and, among other things, the concept of ideological culture and its variations, with a view to describing the ideas and spiritual factors leading to Xian's transformation as a city across its history, as well as the underlying rich Chinese culture continually passed from generation to generation. The living philosophical tradition exemplified in such concepts as the unification of the human mind with the universe, urban construction in harmony with natural beauty, the preservation of historic heritage, harmony and coexistence of human beings with nature and of human beings among themselves, will continue to provide an important spiritual support and practical guide for the people as they build up the modern city of Xian.